

史跡「馬高・三十稻場遺跡」隣接地

— 市道建設に伴う発掘調査報告書 —

1996

長岡市教育委員会

序

市内の中央部を流れる信濃川の左岸に広がる通称「関原丘陵」には、火焰土器で有名な馬高遺跡や玉作りの三十稲場遺跡、高床住居の藤橋遺跡をはじめ、数多くの縄文時代の遺跡があり、あたかも「縄文の里」と言った景観が見られます。この縄文の里に、来る21世紀の宇宙時代を生きる人々に送る「宇宙に学ぶ・遊ぶ」を基本理念としたテーマパーク『スペースネオトピア』や、縄文文化の研究や展示を一つの柱とした『新潟県立歴史民俗文化館（仮称）』が計画されています。この計画地と国道8号線を結ぶ市道が、史跡「馬高・三十稲場遺跡」の東側に計画されました。

このたびの発掘調査は、平成2年度の遺跡確認（試掘）調査後に決定した市道の法線を対象に、確認調査の成果に基づいて行いました。

発掘調査に当たり、御指導をいただきました新潟県教育委員会、惜しみない御協力を賜りました関原土地改良区をはじめ、関係各位に心からお礼を申し上げます。

平成8年3月31日

長岡市教育委員会

教育長 大西 厚生

例 言

- 1 本書は、市道－西幹線77号線の建設工事に伴って史跡「馬高・三十稲場遺跡」の隣接地（新潟県長岡市関原町1丁目字中原）で行った発掘調査の記録である。
- 2 発掘調査は、長岡市教育委員会が調査主体となって平成7年5月から6月にかけて実施した。
- 3 発掘調査の経費は、長岡市一般財源からの支出である。
- 4 発掘調査の記録図面、写真及び出土品は、長岡市教育委員会が保管している。
- 5 発掘調査から本書の作成まで、生涯学習課の駒形敏朗が担当した。

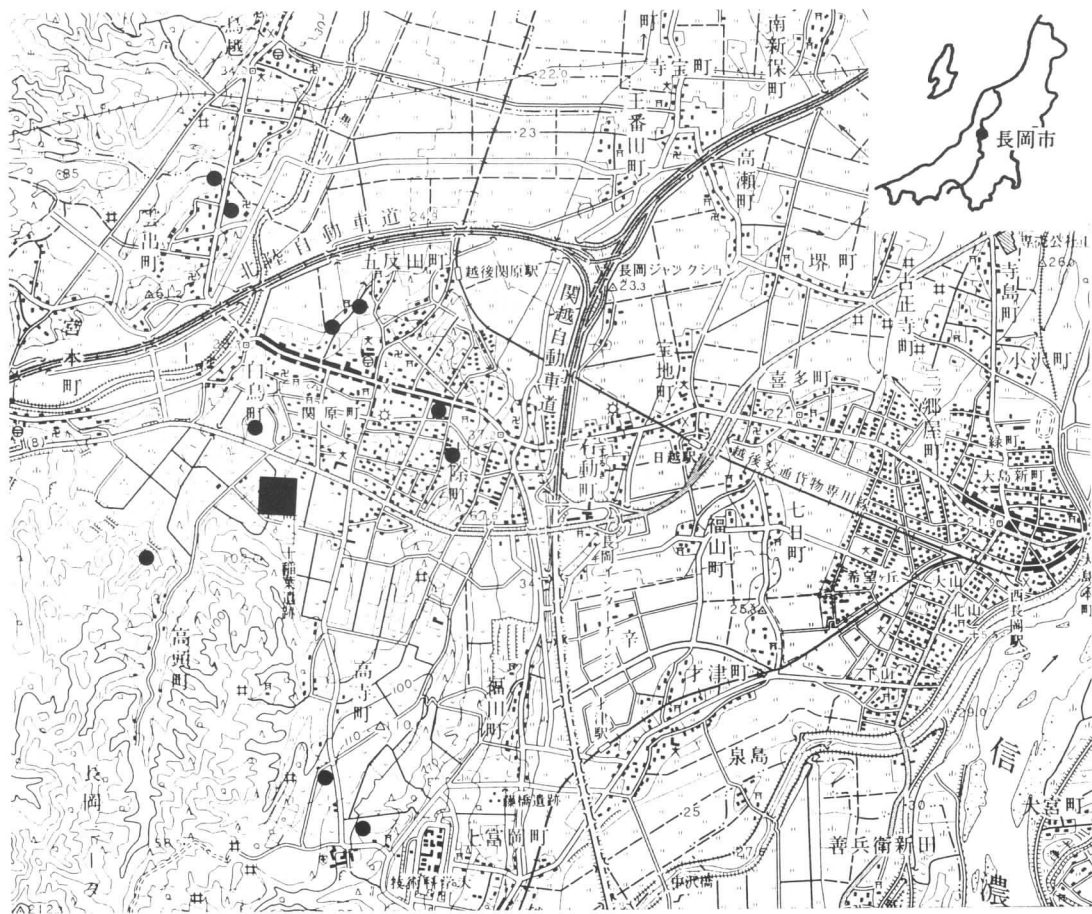
目 次

- | | |
|---------------|---|
| 1 はじめに | 1 |
| 2 環境 | 2 |
| 3 発掘調査 | 2 |
| 4 調査の結果 | 4 |
| 5 まとめ | 5 |

1 はじめに

長岡市の西部に広がる通称「関原丘陵」の一画に、史跡「馬高・三十稲場遺跡」がある。明治から昭和の戦前にかけて、地元の素封家である近藤家が代々にわたって発掘を行い、昭和11年の大晦日に篤三郎氏が馬高遺跡で火焰土器（重要文化財「深鉢形土器」）を発掘したことは広く知られているところである。また、三十稲場遺跡は、縄文時代後期初めの標識遺跡としてのほか、玉や玉を磨く筋砥石などがあり、玉作りの集落としても知られている。

この史跡の南側丘陵上に、平成に入ってからテーマパークの「スペースネオトピア」と「新潟県立歴史民俗文化館（仮称）」が隣り合わせに相次いで計画された。長岡市では、国道8号線からこれらの施設へ接続する市道を、史跡「馬高・三十稲場遺跡」の東側に計画した。このため、長岡市教育委員会は市道の計画に関連する区域を対象に、平成2年秋に確認調査を行い、馬高遺跡寄りの調査グリットから縄文土器などが出土したが、遺構は調査グリットにはないことなどを確認した（小熊博史「馬高遺跡―スペースネオトピア関連道路に伴う確認調査報告書―」長岡市教育委員会 1991年）。確認調査の結果、市道の計画に関連する区域は、馬高遺跡の集落域を外れている可能性が高いが、道路工事の際には、市道の法線内を対象にバックフォードでトレンチ発掘を行い、遺構が検出した場合はその部分を拡張して調査を進めるように、との指導を新潟県教育委員会から受けた。確認調査の成果と新潟県教育委員会からの指導を基に、道路建設を主管する都市計画課と協議を行い、道路工事前に発掘調査を行い、埋蔵文化財の保護に遺漏の無いように努めることを確認した。そして、平成7年5月にスペースネオトピア及び新潟県立歴史民俗文化館（仮称）への接続道路部分の発掘調査に着手した。



第1図 史跡「馬高・三十稲場遺跡」位置図（■）及び縄文時代中期遺跡（●）（1/50000、長岡）

2 調査地の環境

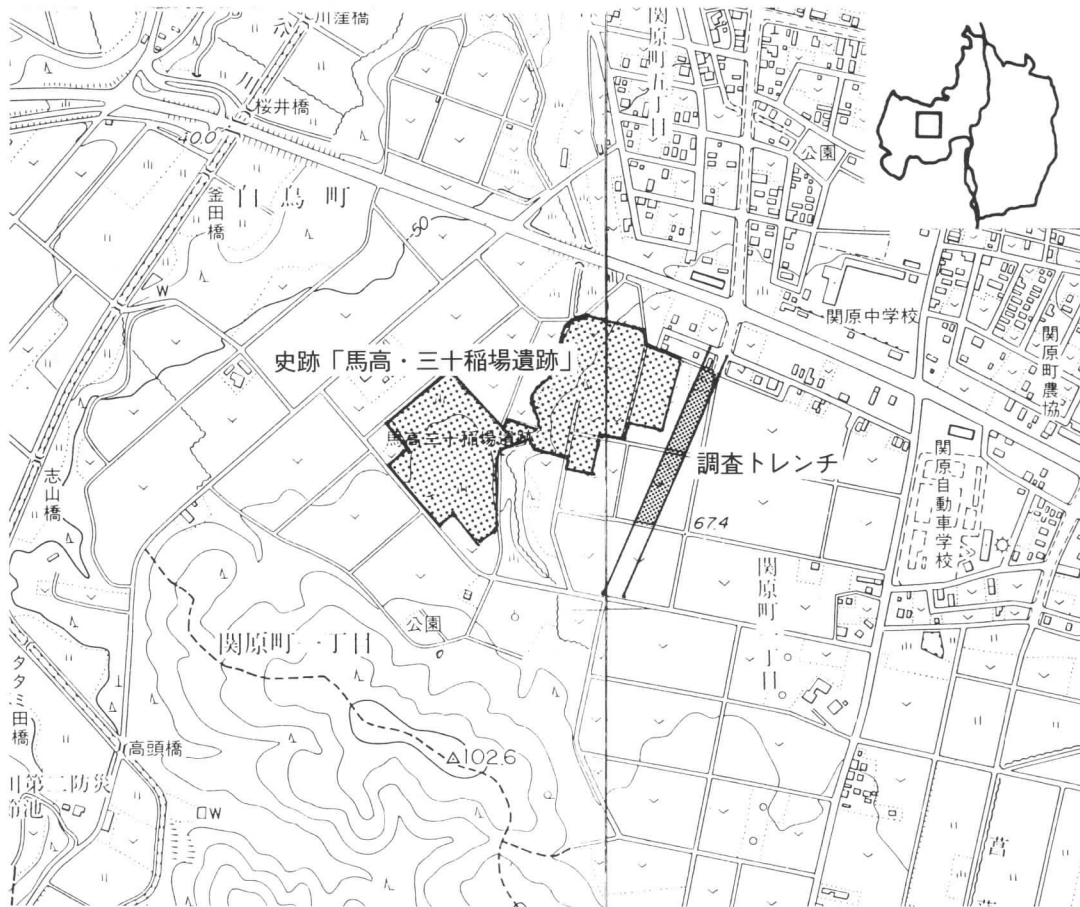
長岡市の中央部を北へ流れる信濃川の左岸には、通称「関原丘陵」と呼ばれる河岸段丘が広がり、南の東頸城丘陵から伸びる山地から流れ出る沢が段丘を横切っている。信濃川の両岸に広がる河岸段丘は、狩猟・採集段階の人々が住まいするのに適しているのか、長野県境の津南町から長岡市に至るまでの河岸段丘上には、旧石器時代から縄文時代の遺跡が多数存在している。

信濃川左岸の関原丘陵には、馬高遺跡（中期）、三十稲場遺跡（後期）、岩野原遺跡（中・後期）、藤橋遺跡（晩期）の、存続した期間が500年以上続き、その結果として面積の規模が大きくなった縄文時代の遺跡と、存続期間が短くて面積の小さい集落跡が点在している。縄文時代中期の集落跡に限ってみると、馬高や岩野原といった大規模な遺跡を地域の拠点的な集落として、瓜割・駒村・松山・火振り坂・雉子打場・笹山などの小規模な集落が、拠点的な集落の周辺を取り巻いて存在している。このことは、この地域において、拠点的な集落と小さな集落とが互いに連携を取りながら、縄文時代中期の社会を形作り、栄えていたことを物語っていると言えよう（第1図）。

なお、調査対象地は市道の用地に利用する前は、葉タバコなどの栽培が行われていた畑であった。

3 発掘調査

5月30日、調査現場にユニットハウス及び簡易トイレを設置し、必要な調査機材を搬入することから、発掘調査を開始した。調査の手順は、市道の法線に沿って設けたトレンチをバックフォードで薄く表土を剥ぎ取りながら、遺物の有無を確認し、地山面まで掘り下げる。その後は、人力でジョレンを使って地山面



第2図 調査地周辺の地形図 (1/10000)



第3図 調査トレンチ図 (1/2500)

を削り、遺構を確認する。そして、地山面で貯蔵穴や柱穴などのピットらしい落ち込みを発掘する。遺物の出土状況等の写真撮影は、そのつど行い、最後に発掘トレンチの位置などを平板で測量する。

この手順に従って発掘を進めたところ、縄文土器が北側の一か所で集中（第3図）が見られた。遺物はその外、主に馬高遺跡に近いトレンチから縄文土器が1点ずつパラパラと出土した程度であった。また、ピットらしい落ち込みがあちこちで確認され、発掘したところ内部の形態が貯蔵穴や柱穴ではなく、風倒木の穴や木の根っこと判断され、結果的には調査対象地には貯蔵穴や柱穴などの遺構がないことが確認された。そして、調査は6月20日に最後の黒色土の落ち込み（風倒木の穴）を発掘し、調査トレンチの位置などを平板で測量し、当日のうちに発掘調査の機材を年間を通じて発掘調査している市内栖吉町の中道遺跡へ搬出し、延べ14日間にわたる現地調査を終える。

4 調査の結果

(1) 調査トレンチの設定（第2図・第3図）

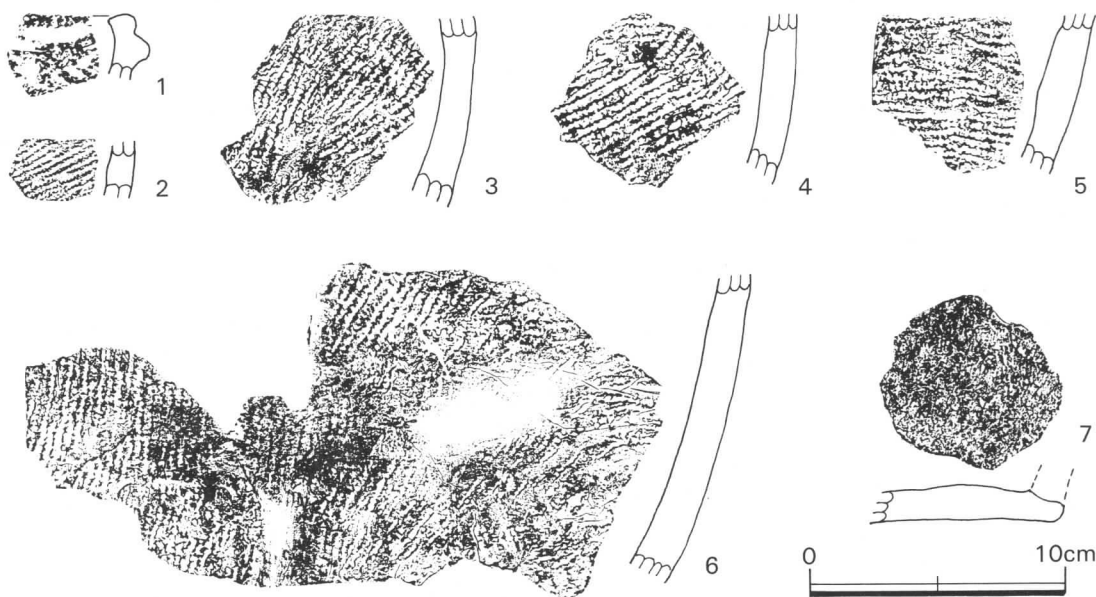
馬高遺跡の東側を通過する道路の法線に沿って、法線と周囲の畑との境から1mほど内側に調査トレンチを設定した。トレンチは馬高寄りの西側に幅11mのトレンチを1本、中央部から東側には4～5m幅のトレンチを2本、都合3本のトレンチを設けた（第3図）。最終的な調査トレンチの延長は約220mで、発掘した面積は約3700㎡となった。

(2) 土層序

発掘した箇所土層序は、10～20cmほどの表土の下が直ぐに地山面に当たるところが大半で、南側の沢のような地形のところでは50cmの表土が覆っていた。長岡市内の畑地の遺跡で一般的に見られる遺物包含層の黒色土は見られなかった。また、拳大から人頭大の礫は、全くと言ってよいほど発掘した土の中にはなかった。

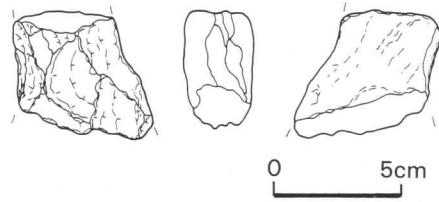
(3) 出土遺物（第4図・第5図）

約3700㎡を発掘した中で出土した遺物は、縄文土器が約40点（第4図）で、その他調査中に採集した欠損した打製石斧が1本（第5図）ある。



第4図 出土土器 (1/3)

1は、口縁部の破片で、口縁に沿って隆起線が張り付けられ、隆起線の下に左下に向く沈線が刻みつけられてる。内面には炭化物が付着している。2の土器は外面に斜行縄文が施されている。3～7は第2図の「縄文土器集中地点」で一括出土した土器で、3～6は斜行縄文が施された胴部破片、7は無文の底部である。第4図に図示した以外の縄文土器は、斜行縄文の小さい胴部破片である。



第5図 採集打製石斧 (1/3)

打製石斧は、頭部と刃部を欠損した胴部の破片で、安山岩を原石としている。重さ約85g。片面（右）に石の表面を残し、もう一方の面（左）をラフに打ち欠いた製品である。なお、左面の右側は打面が欠損した部分であり、撥形の打製石斧である。

5 まとめ

馬高遺跡の東側を通過して、国道8号線からスペースネオトピア、新潟県立歴史民俗文化館（仮称）へ接続する市道の建設に伴って行った今回の発掘調査では、面積の割にはごく少ない縄文土器が出土した程度で、遺構は全く発見されなかった。また、遺物包含層も確認できず、拳大から人頭大の礫が1点もなかった。集落全体の発掘した岩野原遺跡や中道遺跡の集落域からは、用途が不明な礫が石皿や石棒などの大型の石製品に混じって大量に出ている。今回と同じ3700㎡の面積を発掘した中道の第1次発掘調査（駒形敏朗「中道遺跡－第1次発掘調査概報－」長岡市教育委員会 1995年）では、大型トラック2～3台もの礫が集落内から出た。集落内に大量の礫があるということは、縄文人が石皿や石棒などの道具に加工したり、住居内の炉石や掘立柱穴の根固めなどに使用するために、河原から運び込んで用意した結果とも考えられる。また、岩野原の場合は、貯蔵用の袋状ピットの覆土や底面に、大きな礫が見られた。調査中の中道でも袋状ピットと礫の状況は岩野原と同じである。今回の調査地に礫がないという現象は、貯蔵穴や柱穴などの遺構がないこと、遺物を包含する土層がないことなどと合わせて考えると、恐らく調査地が集落域を外れていることを示しているのではないかと思われる。このことについては、将来、史跡に指定されている馬高遺跡の集落域を発掘する機会が与えられたときに、礫があるかどうかを確認したい。

調査体制

調査主体者 長岡市教育委員会（教育長 大西厚生）
 調査担当者 駒形敏朗（長岡市教育委員会生涯学習課）
 調査事務局 長岡市教育委員会生涯学習課（課長 廣川清喜）

調査に御指導・御協力をいただいた方々

荒木茂 小熊博史 関原土地改良区



史跡「馬高・三十稻場遺跡」



調査地遠景



バックフォアでの発掘



バックフォアと人力による発掘風景



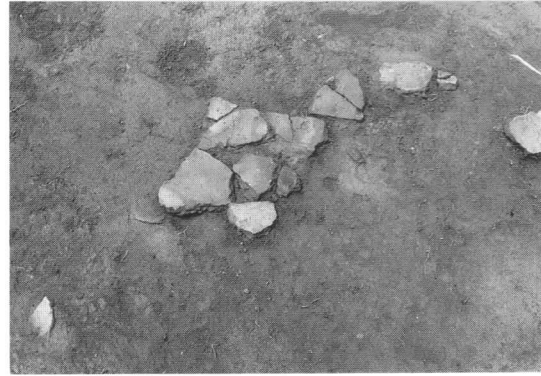
遺構確認風景



測量風景



発掘終了後のトレンチ



縄文土器集中地点出土状況

第6図 発掘調査写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせき「うまだか・さんじゅういなばいせき」りんせつち							
書名	史跡「馬高・三十稲場遺跡」隣接地							
副書名	市道建設に伴う発掘調査報告書							
巻次数								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	駒形敏朗							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940 新潟県長岡市幸町2-1-1 Tel 0258-39-2240							
発行年月日	西暦1996年3月31日							
所収遺跡名 ふりがな	所在地 ふりがな	コード		北緯 ° ' "	東緯 ° ' "	調査期間	調査面積 m ³	調査原因
		市町村	遺跡番号					
史跡「馬高・三十稲場遺跡」隣接地	長岡市関原町1丁目字中原1000外	15202	18	37°26'35"	138°46'22"	19950530 ～0620	3,700	市道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
史跡「馬高・三十稲場遺跡」隣接地	遺物包含地	縄文中期	なし		縄文土器 40点 (1.4kg) 打製石斧 1点			

史跡「馬高・三十稲場遺跡」隣接地

－市道建設に伴う発掘調査報告書－

印刷：平成8年3月30日 発行：平成8年3月31日

発行：長岡市教育委員会 印刷：(株)北越時報社